

Title	<研究論文>老化に対する知的障害者の心理的变化を支援する生活課題の検討
Author(s)	張, 貞京
Citation	教育方法の探究 (2002), 5: 83-92
Issue Date	2002-03-31
URL	https://doi.org/10.14989/190257
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

老化に対する知的障害者の心理的变化を 支援する生活課題の検討

張 貞 京

I 問題

近年、知的障害者における高齢化が進み、新たな援助内容、方法が取りくまれようとしているが、当事者的高齢化に対する不安をとらえた援助内容、方法となっているのだろうか。高齢化傾向は厚生労働省が2000年に「知的障害者の老化対応検討会」を開催し、対応策を検討していたことから明らかである。入所更生施設に限ってみても利用者のうち、60歳以上の者の比率は1985年には2.3%だったのが、1999年には8.8%になり、確実に高齢化が進行しているのである。1999年に集計されたものによると、知的障害者を援護する施設の在所者中、50歳以上の人が26,000人を超え、うち50歳代にいたる人が17,000人と半数以上を占めている。また、40歳代だけでも26,000人を超えているため、今後の老化していく人達への対応も求められているのである。

通常の場合においても高齢化傾向は老年医学、老年社会学などにおける盛んな研究の数が物語っている。主に、身体的な変化や痴呆のような脳の変化などに関する研究が数多くなされ、医学的な老化の解明や対応が主流である。

それに比して、老化に関連する心理的な変化をテーマにする研究は数少なく、その変化を踏まえた心理的な援助に関するものはさらに少ないものであったが、1996年を境に心理的变化や援助に関する研究が増加する傾向をみせてきた。

社会的な背景に阪神、淡路大震災による老人の精神的なダメージが明らかになり、精神的なサポートシステム作りが訴えられるようになったこと、そして、以前からの医療や福祉の現場における当事者や家族への精神的な支援の視点が強調されるようになったことがあると言える。

老年期の心理的变化については心理テストを用いて心理特性およびストレス反応などの心理的な不安を明らかにしているものに杉山（1984、1995）の研究があり、老年期への心理的援助の側面からは回想法や心理劇の方法を用い、当事者への支援を試みているものは高原（1997）、渡邊他（2001）をあげられる。

これらの研究によると、高齢者の心理を決定する状況には役割や人間関係、孤独など、さまざまな喪失体験があるとされる。Gatz（1997）は配偶者の喪失体験による心理的な不安定さをみせた高齢の女性について触れており、身体的な変化と同時に、身近な人との関係において、喪失

体験が高齢者の心理状態に大きく作用しているのである。

また、高齢期を社会的な役割から引退する60歳以上を対象にしているものが多く、60歳代から高齢期の心理的变化について注目している。

しかし、老化していく過程における心理的な変化や受容内容について深く触れられているものは少ない。その中で、杉山（1984）は向老期と言う表現を使い、定年退職のように社会的な活動の場から退いていく60歳までの50歳前半と後半、高齢期の70歳以上とを心理テストを用いて比較している。

杉山は向老期に体験するさまざまな心理的、社会的危機の根底に共通しているものは社会的に引退した後の高齢期への予期不安があるとし、予期不安は「生きがい」という生きていくうえで意欲ととらえられるものに影響を与えたとしている。そのため、向老期における準備の程度によって、高齢期の安定が左右されるとする。「生きがい」意識を強める準備の内容として、持ち家や子どもとの同居、公的保障、健康づくりなどがあるとしている。さらに注目されるのは、サークル活動や趣味の有無との関連を向老期と高齢期を通して比較した際、向老期がこれらの活動を積極的に捉えていないことや高齢期には趣味の有無が大きな意味を持つ結果から、いわゆる余暇活動の必要性和適切な指導が求められるとしており、高齢期への準備期間としての大切さを示唆している。

通常の場合において心理的、社会的な変動の中で老化していくための予期不安が大きく作用していることは明らかであるが、知的障害者の場合はどのように作用しているのか。これまで知的障害者の老化に対する研究は、老化による職業意識の低下、機能の低下や行動障害に関連する研究と早期老化が注目されるダウン症候群（長谷川・池田 1998, 2000）が大半を占め、ダウン症候群以外の知的障害者の老化に関する予期不安を含む心理的变化や心理的な支援の視点に立つ研究は少ない。

その中で、鈴木（2001）は老化していく知的障害者の心理・行動障害の程度、内容について調査報告している。知的障害者の老化が早いと捉えられていることから、40歳以上を対象者に選び、日常的に関わっている指導員へのアンケートを用いて通常の場合と比較し、知的障害者の方が他者との関係においてトラブルが多く、行動障害が生じやすいとしている。鈴木の研究は指導員がとらえた表面的な言語、行動を基準としており、対象者の心理的な変化には言及することができず、集団生活の視点に立つ考察までには至っていない。老化していく知的障害者が感じる不安について明らかにする必要がある。

多くの知的障害者が暮らす入所型の施設は、内容の充実などの課題を持ってはいるものの、公的保障が整っている生活環境といえる。施設に暮らす人たちにとって、杉山がいうような持ち家や公的保障などは高齢期への予期不安を抱かせる材料ではないと考えられ、Gatzがいう身近な人の変化または喪失体験、健康状況などが主な要因となるのであろう。

以上より、知的障害者入所施設に暮らす知的障害者本人の老化していくことに対する予期不安

を明らかにし、生きがいのある生活を営んでいくための生活における心理的な支援の手掛かりを得ることが求められる。

そこで、本論は知的障害者が老化に対する予期不安をもち、その背景には身体的な変化および身近な人の老化や死が主な要因であることを明らかにする。老化に怯むことなく、積極的に受容していくためには、身近な人の老化を受容することによって、自分自身の変化の受容につながっていくことと捉え、入所施設において将来的な展望を持つことができるように支援していくための手がかり、生活課題について検討考察することを目的とする。

II 方法

表1 対象者の年齢別構成数および受診・内服状況（単位；人）

	女性	男性	合計	身体的な疾病による 受診または内服*	精神的な疾病による 受診または内服**
20歳～24歳	1	0	1	1	0
25歳～29歳	0	0	0	0	0
30歳～34歳	1	1	2	2	1
35歳～39歳	1	0	1	1	1
40歳～44歳	1	1	2	2	1
45歳～49歳	14	2	16	16	6
50歳～54歳	19	18	37	36	6
55歳～59歳	8	1	9	9	2
60歳～64歳	6	2	8	7	2
65歳～69歳	2	0	2	2	2
70歳以上	2	0	2	2	0
合計	55	25	80	78	21

1. 対象

知的障害者入所施設に暮らす男性25人、女性55人。年齢別構成は表1の通りである。

2. 手続き

2000年4月から2001年8月まで、週1回の間隔で対象者80人のそれぞれについて、個人インタビューの方法をとり、リラックスできるように日常に関する話題で

ラポールをとった後、「若いときのあなた、今のあなた、もっと年をとったときのあなたのどれが好きですか？—それはなぜですか？」という過去、現在、未来の自分をとらえる質問を行い、理由を尋ね記録した。

身体的な変化や精神的な不安を測る目安として、施設内で報告された資料より、対象者の身体的、精神的な疾病の有無を判断する受診・服薬状況を表1に示した。

III 結果と考察

回答したのは対象者80人のうち、24人（女性22人、男性2人）であり、残りの56人は回答を得ることができなかった。24人の回答内容を示したのが表2である。

1. 分析の視点

老化に対する予期不安の有無や受容に関する発言を基準とし、過去や現在の自分が好きと回答し、年をとることに対して明らかに不安をもっていると判断された対象者を「予期不安をみせたグループ」、不安をみせながらも積極的に受容していると思われる回答内容の対象者を「積極的な受容グループ」、その時点についても不安を語らなかった対象者を「安定グループ」と分類し、それぞれについて分析、考察する。

また、回答が得られなかった対象者についても分析、考察を行う。

表2 過去、現在、未来の自分に対するイメージ

タイプ	精神的な疾病による受診または内服	対象者(年齢)	質問1 ; 若いときのあなた、今のあなた、もっと年取ったときのあなた、どのあなたが好きですか？	質問2 ; それはなぜですか？	質問3 ; 年をとるというのはどういうことですか？
予期不安を見せたグループ	○	A (44)	若いときが一番好き。	もう年きちゃったし、もう45やし。	
		B (48)	若いときがいい。	山登りもしてたから。	
		C (53)	若い方。	年取りたくないから。	お婆ちゃんになること。(お婆ちゃんになるとはどういうこと?) Kさんみたいに白髪になって、年になったら仕事にいけなくなるから。
		D (48)	若いでいたい。	年とるの嫌い。もっと運動がしたい。それで勉強したいな。	
		E (46)	若かったとき。	なんとなく。	
		F (50)	若いとき。	よかった。	かなわん。年とったらよく動かへんから。Tさんになるみたいになるから。かなわん。
	○	G (61)	若いとき。	昔は可愛かった。	中学校の同窓会でみんなおじさん、おばさんになっていた。昔はみんなかわいかったのに。お母さんの頭が白くなるの、いややな。手がふるえるからいや。
		H (53)	若いときが好きやね。	なんでも	あかん。なんでも。わからん。
		I (52)	若いときがいい。今でもいい。	今やったら何でもできるから。	ちょっと疲れるようね。
		J (47)	今	年とりたくないね。	お婆ちゃんになるし、だんだん死んでいくし、いやや。
	○	K (54)	今がいい。	?	怖い、死ぬから。
		L (52)	今	わからない。	若くないときは元気ない。
		M (47)	今がいい。	(首を傾げる)	嫌い。
		N (44)	今がいい。	今は大人で一番いいと思う。	
		O (50)	今	好きなことできるから。	
	P (61)	今	色んなことできるし。	もうできなくなる。体、動かなくなる。	

	Q (49)	今	赤ちゃんのときはお母さんとよく喧嘩して玄関出て迷子になった。	
	R (63)	元気でやりたい。元気なときが一番いい。		いや。早よう亡くなるのがいやで、長生きした。
	S (64)	今	訳もわかっているし、子どもの時は訳もわからんと言っていて、怒られとったし。今はいろいろわかってきた。	これより（体が）もっとひどくなるからと言われているから。
積極的な受容グループ	○ T (66)	若い頃	やりたいこと、好きなことできたから。今でも自由にできるけど。	今、そういうこと考えてない。これからもいっぱいできる。これからもお炊事好きだから。楽しいから。
	U (72)	今がいい。	自分で自分のことはできるし、今は人が物や服やら買ってきたら名前つけてあげたりすることが私の楽しみ。よそに遊びに行く時、他の人は若いし、若い人と行くのが楽しみ。	もっと、今は70にもなるけど、私をもっと年いくとみんなに迷惑かけないでいきたいから、若い人やったらみんなで良いようにしてくれるから、年いっても若い人と買い物とかいくと楽しみがあるから。
安定グループ	V (60)	がんばるときの私が好き。		大人になっていくこと。
	W (55)	どっちも好き。		
	X (53)	全部好き。		53だから、今度54。ねずみ年（死ぬことはどういうこと？）あまり知らない。

2. 予期不安をみせたグループについて

質問1, 2に答えた24人のうち、AからSまでの19人の対象者がこのグループに分類され、回答が得られた対象者の半数以上がなんらかの予期不安を語っていた。このうち、8人が若い頃の自分が好きと答え、残りの8人が現在の自分が好きだと答え、2人は元気なときが良いと回答している。

若い頃や現在を選んだ理由として「何でもできる」ことをあげたのが5人で、若い頃に対して有能感を強くもっていることが伺えた。また、「年とりたくない」と理由は語られなかったが、漠然とした将来に対する不安をもっていると思われる回答をしたのが3人であった。

さらに、若い頃や現在の自分を選んだ対象者らは質問3に対して、6人が「疲れる」「元気がなくなる」「できなくなる」と回答し、一人が「昔は可愛かったのに…」と答えており、現在よりさらに加齢していくことを否定的なイメージでとらえていた。

イメージを語る事ができた対象者に比して、「あかん、なんでも」と回答した対象者は老化に対して強い不安をもっていると考えられ、どのような変化が起こるのか、正確に捉えきれない恐怖に似た感情までがうかがわれる。

また、詳しくみていくと、年をとることが「お婆ちゃんになる」「○○さんみたいに白髪になる」「お母さんの頭が白くなるの」と表現し、そのような表面的な変化への気づきは生活をとも

にする仲間や両親の姿からイメージされている。

そして、3人が年をとることについて「怖い」または「いやや」と表現し、「死」に結びついていくととらえているための予期不安を語った。

対象者が老化を測る基準として、表面的な外見の変化および身体的な機能の低下が使われており、このような基準は日々接する身近な人の姿から作られているようである。表面的な変化は自分自身の変化として明確な基準となるため、日常的に自分の表面的な変化について不安を抱いていると考えられる。

3. 積極的な受容グループについて

このグループの2人は年齢的にも70歳を前後にし、まさに老化していく過程にいる。2人の特徴的だったのは、若い頃が有能感もあり、今よりも身体的な自由度が高かったと認めつつ、現在の自分を受け止めていかなくてはならないと自分自身の老化を対象化していることであった。

それぞれについて見ていくと、Tは精神的な疾患により、精神科受診と内服を続けており、なんらかの心理的な不安をもっていると考えられるが、「そういうこと考えていない。これからもいっぱいできる」と答え、事実としての老化していく自分を想像して不安になるよりは、これからできることがあるとポジティブに自分を捉え、励ましていることがうかがえる。仕事（炊事）が楽しくできるから、これからも頑張っていこうとしており、仕事上の達成感や仕事仲間によって支えられていることが大きく作用しているであろう。

もう一人、Uは年齢的に70歳をすぎた高齢にも関わらず、現在の自分についてポジティブな捉え方をしており、体力的に衰えたことを対象化している。そして、体力的に衰えている自分がこれから日々の生活を楽しんで生きていくためには、どのようにすればよいかを考えている様子が回答からよみとれる。集団生活をしている中で、自分より若い人たちと交流し、支えてもらいながら生活していくことに気づき、ただ支えてもらうばかりでなく、身体的に衰えた代わりに自分のできることで、若い人たちを支えていくことを楽しみにしていることであった。生活環境において、異年齢の人たちとの交流が生活の刺激となっていることがよくわかる。

二人の回答に共通しているものは、それぞれ仕事や生活のような集団において、多くの人から励まされ、支えられてきたことが励ましや良い刺激となり、老化していく自分を積極的に受け止めていくことにつながっているであろう。

4. 安定グループについて

このグループはわずか3人であるが、質問1に対して全員が年をとることを含めて、どのときの自分も好きと答え、ポジティブに自分をとらえている。3人のうち2人が質問3に対して、「知らない」「大人になっていく」と答えていることから、年をとることについて老化による身体的な能力の低下を予想したのではなく、年齢を重ねていくという量的な変化としてとらえている

と考えられる。

そのうちの一人、Vは「がんばるときの自分が好き」と答え、量的な変化としてとらえていることが老化を実感していないためではなく、仕事や集団生活において、がんばっている自分をとらえている。

これは仕事の結果も大切だが、日々の生活を営んでいく過程において、がんばっている自分を評価されていき、その毎日の蓄積が大きな意味を持つと語っているようである。毎日を精一杯生きていき、そんな自分が好きであれば、身体的な衰えがあったとしても、老化していくことに対する不安とむきあっていくことができるのではないだろうか。

5. 回答をえられなかった人たちについて

対象者のうち56人が質問に対して回答しなかった。これらの対象者は質問の意図が理解されなかったり、表現する言語手段を持っていなかったりした人が多く、質問を理解したと思われる人の中には「いや」と答えることに対して拒否反応を示す人が多かった。

表1に示した身体的な疾病や精神的な疾病の有無に関連させると、回答しなかった56人はほとんどがなんらかの疾患を持ち、精神的な疾患を体験していると考えられるが、今回のインタビューでは回答を得ることができなかった。疾患の状況からみると、彼らが身体的な変化を日常的に体験していることは明確であり、漠然とした不安をもっていることは容易に想像できる。

また、質問に対して拒否反応を示した対象者らは老化の事実を感じているため、老化に関する質問への回答を拒んだと考えられ、表現できない不安をもっていると考えられる。表現できないということは老化に対する不安を一人で抱えていることであり、不安に対する適切な指導、援助がされにくくなるといえる。老化に対する不安を対象化して、積極的に受け止めていき、将来への展望をもつことができるためには、不安を言葉にして表現していくことから始める必要があるといえよう。

IV 総合考察

1. 老化に対する予期不安の背景にあるもの

対象者の半数以上が老化に対する予期不安を話し、できればなりたくない否定的なイメージをもっている。

対象者らが暮らす入所施設は仕事上の決まった定年もなく、本人の状態に合わせた対応がなされる。杉山（1984）が予期不安に影響を与える要素としてあげていた定年間近の不安はない。また、老後の公的保障や持ち家など、経済的な不安はないと言えるので、本論の対象者らが語った不安の背景には身近な人の変化がもっとも大きな影を落としていると考えられる。

以前は元気で、頼りにしていた両親や複数の仲間の変化を見ることによって、加齢していくこ

とが老化そのものであるととらえ、そして、身近な人の死による喪失の体験から、人によっては死へと結びつくことへの恐怖や現在の有能感が失われるかもしれないという不安を抱えているのである。何ができて何ができなくなるのではなく、現在の仕事を中心とする生活が同じように営めなくなるという不安であり、明らかに身体的な機能が低下し、仕事にもいけなくなっている仲間をみながら、自分自身に当てはめて考えている現われであろう。

回答が得られた対象者は悩みを言葉にして表現できるし、自分の身体的な変化をとらえて訴えていくことができ、健康作りに関する指導員の助言を実践していくことができる。心理的な不安についても、語られることによって、老化に向き合う助言や老化が一人だけの問題でない連帯感を得ることができるだろう。

2. 予期不安と向き合うための援助

予期不安を示した対象者に比べて、どの自分も好きと回答した3人の対象者は、現在の自分自身に対する有能感による充実感が大きく、可能性のある未来として展望をもっていると考えられる。3人は50歳以上になった年齢を考えると、老化に対して否定的なイメージを示した他の19人と同じく、両親の老化に直面している。それにも関わらず、明るい展望を語っていた。それはこれまでがんばってきた自分、できるようになった自分への信頼感を持ち、自分の可能性を描いていたためといえないだろうか。

変化してきた自分をとらえ、変化し続けている自分をとらえる。それによって、変化するであろう自分をとらえることができるのである。変化していく自分をとらえることによって、適切に対応する生活上の計画や行動が可能になるのである。

安定した回答をした3人に比べて、回答を得られなかった対象者はどうか。彼らは表現できないまま不安を感じていたり、身体的な変化について自覚して訴えていくことが難しかったりすると考えられる。周囲が気づいたときは深刻な状況に発展していることも考えられ、心身ともに意欲を失っている可能性も高い。

知的障害者の老化への対応として、行政は施設外のサービス利用、施設の構造設備や職員配置などへの配慮をうたっているが、これらは高齢期の対応だけをとりあげており、心理的な不安への対応について言及されていない。小野澤（2001）はライフステージに目を向け、各々のライフステージに応じたサービスの充実と次のステージへの移行を容易にするサービスの連続的な確保が求められると指摘する。

つまり、生涯発達の見地にたち、老化への移行をスムーズにするための準備ステップにおける対応が求められ、機能低下のような身体的な変化を補っていく対応だけでなく、老化への予期不安を軽減させていく心理的な受容を助ける対応、援助のための生活実践が求められるのである。過去、現在、未来を通して、それぞれの変化を対象化し向き合うために、集団において表面化され向き合い、連帯感に基づき励まし合うことを準備ステップにおいて、順次行っていくことが必

要なのである。

また、積極的に受容していることがうかがえたTとUの例より、老化は事実として認めていくことが必要であるといえよう。身体的な衰えや疾患などを体験しつつ、周囲の人に支えられ、仲間との楽しい仕事や生活時間を送っていく中で向き合っていくことができたのであろう。仲間集団において支えてきた過去の体験が対象化できれば、現在のできることをフルに活用し、老化していく過程において支えられていく自分を積極的に受け止めることができる。

3. 老化へのよいモデル

予期不安の背景には身近な人の変化が大きく作用していた。逆説的にいえば、身近な人の良い老化モデルがあれば、勇気つけられ、積極的に老化を受け止めていくことにつながると考えることができる。身体的な衰えがあっても、年齢に合った適切な活躍の場が与えられ、活動するモデルが提示される必要があるだろう。

できなくなることばかりが増えていくのではなく、きちんと健康づくりに注意し、仕事に励んでいるモデルや老化を機に新たな活動へと展開できたモデルなど、多様なタイプが身近にいることによって、老化への明るい見通しを持つことができるであろう。

そのようなモデルに積極的に接していくためにも、さまざまな人間関係が用意される必要があり、杉山がいうように趣味を育てる余暇活動を積極的に配慮し、自分に対する新たな発見や楽しみを準備する必要がある。

4. 生活実践上の課題

まず、身近な人の変化に対する悩みを抱え込むのではなく、客観的にとらえる場を設け、集団において話し合うことによって理解を助け、その変化への対処方法などを学ぶようにすることが求められる。一人だけでない集団における連帯感や縦の人間関係によって支えあっていくことが確認されていくように配慮していく必要がある。その際、食事会のようなリラックスできる場面を設定し、自由に話すことができるように工夫することが望まれる。

そして、身近な人の変化を踏まえ、自分自身の変化への対応を学んでいくようにし、健康づくりなどの身体的な老化を遅延させる方法を学び、実践できるよう指導援助していく。老人体験など具体的な学習方法を用いつつ、過去の映像などを通して自分や仲間の外見的变化などをとらえていく時間を設定し、身近にいる理想となるモデルとの交流や体験談を聞く機会などを工夫、用意していくことが望まれる。

5. 今後に向けての課題

本論ではインタビューの方法を用いたため、回答できなかった対象者の老化に対する認識を正確に読み取ることができなかった。今後、表現できなかったと思われる対象者らの老化に対する

イメージを明らかにし、指導援助の方法について検討が必要であろう。

また、老化への準備ステップにおける適切な指導・援助について考えていく際、老化に対する予期不安の有無だけでなく、老化を感じていくプロセスについて、さらに検討を加えていく必要があるだろう。

<引用・参考文献>

- 杉山善朗 向老期から高齢期にわたる心理・社会的変動 心理学評論 27,3. 1984
- 杉山善朗 高齢者における心理社会的要因とストレス反応 札幌医科大学医学部 人文自然科学紀要 36. 1995
- 高原朗子 福祉現場における心理劇—高齢者・障害者・援助者への適用— 北九州大学文学部紀要 人間関係学科 4. 1997
- 渡邊映子・宮本文雄・森俊之 施設利用高齢者の心理的援助に関する研究—回想法によるコミュニケーションの改善に向けて— 東京成徳大学研究紀要 8. 2001
- Gatz, M. Emerging Issues in mental health and aging. American Psychological Association, 1997
- 長谷川桜子・池田由紀江 施設に居住するダウン症候群者における精神症状と異常行動の加齢的变化 筑波大学リハビリテーション研究 7,1 1998
- 長谷川桜子・池田由紀江 ダウン症者における身体的・心理的加齢変化—最近の研究の概観 発達障害研究 22,2 2000
- 鈴村健治 一般高齢者と知的障害年配者に見られる心理・行動障害の比較分析 福祉と人間科学 2 群馬松嶺福祉短期大学紀要、2001
- 小野澤昇 知的障害者援護施設における高齢者支援 『発達障害白書 2002』 日本文化科学社、2001
- 日本知的障害福祉連盟 『発達障害白書 2002』 日本文化科学社、2001
- 樋口恵子 監修 『女・老いにのぞむ』 ミネルヴァ書房、1995
- シモーヌ・ド・ボーヴォワール 『La Vieillesse』 Editions Gallimard、1970
(朝吹三吉 訳 『古い 上下』 人文書院、1972)
- 中島健二 『この日本で老いる』 世界思想社1999
- 竹内義彰 『教育と福祉の統合』 ミネルヴァ書房1987
- 斎藤正彦 老いと死の臨床 こころの科学 96 日本評論社、2001
- 小澤勲 痴呆という生き方 こころの科学 96 日本評論社、2001
- 須貝佑一 老年期精神医療の状況 こころの科学 96 日本評論社、2001

(研修員)